

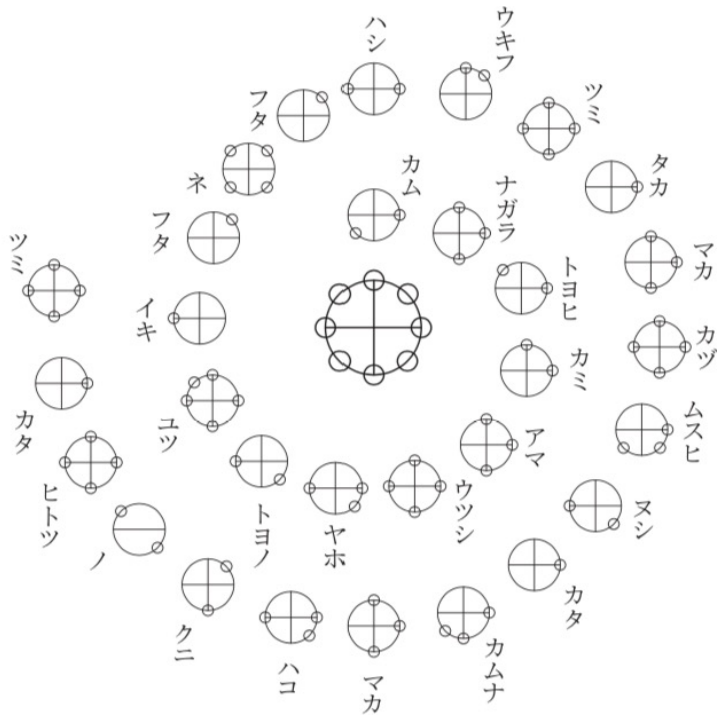


カタカムナウタヒ

17~21首

相似象学会誌12号

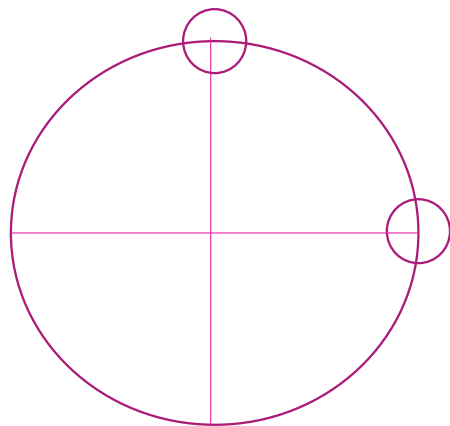
第十七首



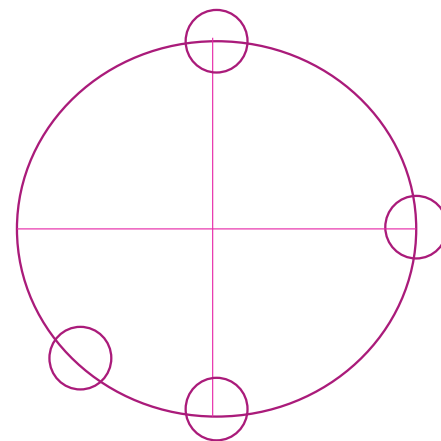
<解説>

カムが何回も(ナ)「カ」としてあらわれ(ラ)、統合四相(トヨ)の万物万象の根源(ヒ)の「カミ」がアマにウツし示され、やまで親和(ホ)され、現象(トヨ)に変遷(ノ)して発生(ユ)する個々(ツ)の微粒子(イ)の生命(キ)の二つ(フタ)の根(ネ)として二つ(フタ)の正反(ハ)に示される(シ)。そのウキフツミ~「ウ」(潜象と現象の界面)から発生(キ)して増える(フ)個々(ツ)の質量(ミ)の「タカ」(「タ」した「カ」、独立した「カ」、科学の陽子に当たる)や「マカ」(「マ」になる「カ」、科学の中性子に当たる)の、「カ」の個々粒子(ツ)を発生する(ムスヒ)潜態(ヌ)の主人(シ)は、「カ」が「タ」した「カムナ」であり「マカハコクニ」~「マ」と「カ」によって構造(ハコ)された原子・分子(クニ)の変遷(ノ)の「ヒトツカタツミ」~「ヒ」によって統合(ト)された個々(ツ)の「カ」から「タ」した粒子(ツミ)である。

ヒトツカタとは、ヒトツのカタ、「カ」から「タ」したものという意味で、全てはヒトツ、即ち「相似象」である。

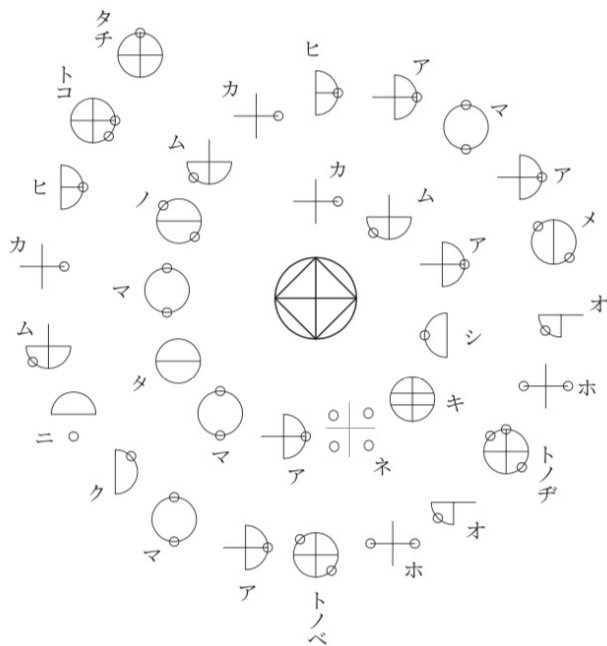


カミ
アウ



カムナガラ
カムアマ

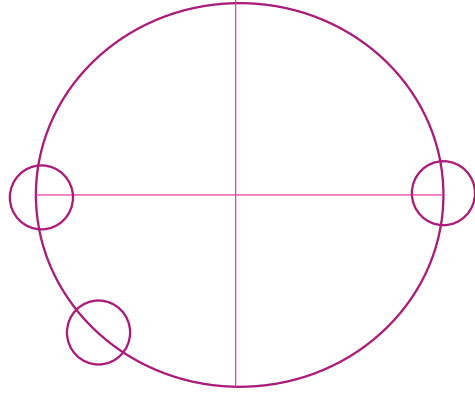
第十八首



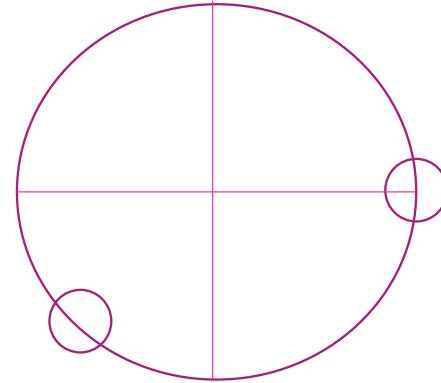
<解説>

カムが何回も（ナ）「カ」としてあらわれ（ラ）、統合四相（トヨ）の万物万象の根源（ヒ）の「カミ」がアマにウツし示され、ヤまで親和（ホ）され、現象（トヨ）に変遷（ノ）して発生（ユ）する個々（ツ）の微粒子（イ）の生命（キ）の二つ（フタ）の根（ネ）として二つ（フタ）の正反（ハ）に示される（シ）。そのウキフツミ～「ウ」（潜象と現象の界面）から発生（キ）して増える（フ）個々（ツ）の質量（ミ）の「タカ」（「タ」した「カ」、独立的な「カ」、科学の陽子に当たる）や「マカ」（「マ」になる「カ」、科学の中性子に当たる）の、「カ」の個々粒子（ツ）を発生する（ムスビ）潜態（ヌ）の主人（シ）は、「カ」が「タ」した「カムナ」であり「マカハコクニ」～「マ」と「カ」によって構造（ハコ）された原子・分子（クニ）の変遷（ノ）の「ヒトツカタツミ」～「ヒ」によって統合（ト）された個々（ツ）の「カ」から「タ」した粒子（ツミ）である。

ヒトツカタとは、ヒトツのカタ、「カ」から「タ」したものという意味で、全てはヒトツ、即ち「相似象」である。

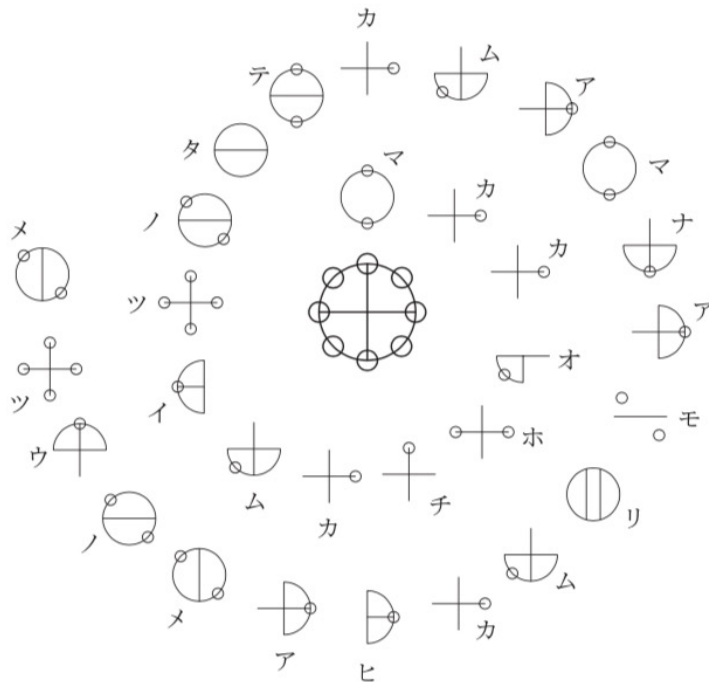


カムアシキ
オカシ
オホ



ムカヒ
カム
カムヒ

第十九首



<解説>

「カ」は「カ」だけでは何の意味も持たないが、「マカ」（マとカの宇宙界）に於ける「カ」は「オホ」（六方環境の親和）を持続（チ）する潜象（カム）として存在している。そして「カ」が現象（イ）の個々（ツ）に変遷（ノ）すれば、タテ（正反）に分かれて、正の「カ」は現象（カタチ）にあらわれ、反の「カ」はその現象（カタチ）の中の潜象（カム）のチカラ（アマナ）となる。そして「アマナ」（オホチカム）と「アモリ」（「ア」に「モ」して「リ」するもの、アマナのチカラにともなうだけの「リ」したアメ）との「ムカヒ」によって「アメノウツ」（アマのウツシ）が発生する（メ）のである。

第十七首、第十八首「カムナガラ」「カムアシキネ」で述べてきた通り「カム」は「アマ」に「ウツシ」される「ネ」として「トコタチ」されているモトのチカラであるが、ここではさらにそのチカラを現象界における「ウツシ」のスガタとして、そのメカニズムともいべき「アマナ」の構想（オコナヒ）を具体的に示している。

ウキフ：界面から生まれて発生するモノ。
「フ」は「芝生」をイメージすると分かりやすい。
現代科学でいうプラズマ、陽子、中性子などの核子にあたる。

タカ：「カ」が「タ」して独立の形を示す「カ」
現代科学でいう陽子、反陽子にあたる。

マカ：「マ」の形（中和性）を示す。「カ」。
現代科学でいう中性子にあたる。

マカハコクニ：「マ」における「カ」、即ち「カ」と「ミ」によって
「ハコ」（正反の繰り返し）の形をとる＝バランスをとる
モノが構成される（クニ）。ここでは原子を指す。

第二十一首

<解説>

「イマ」とは「トキ・トコロ」の「マ」の最も小さい単位。

「イマ トハ ヒトワ」

「イ」の「マ」である「今」は、「イマ」「イマ」が統合された（トハ）結果として存在するのであり、次の「イマに統合されて「ヒトワ」となる。

「ミコ ニホ ヤホ」

「ミコ」とは力がかかわる生命力の繰り返し、「ニホ」で親和が定着していくこと、「ヤホ」は「ヤ」まで親和が進むこと。我々の生命の動き（ミコ）は「イマ」「イマ」に定着的に（ニ）カムウツシ（ホ）され「ヤ」まで生きるようにカムの親和（ホ）がなされている。

「アマツクニコトミチ カタカムナ」

「アマ」界の個々（ツ）の「クニ」が「イマ」「イマ」に「ミコニホヤホ」の繰り返され（コト）ミの持続（ミチ）を持つことができるのは、「カタカムナ」によるものである。

「ナミマリメグル オホトコロ」

「カタ」の「カムナ」が「ナミ」として「マリ」として「マワリテメクル」環境（オホ）のカムの統合発生（ト）が生命の場（コロ）となっている。

「イモマクカラミ ヌフトヤマト」

個々の生命に伴っている（イモ）「マクミ カラミ」が目に見えぬ（ヌ）二つの対向発生（フト）のすべによって「ヤ」まで「マ」に統合（ト）されるのである。

